

浄

monthly
JŌDO

土



1999

3

March

法然上人鑽仰会



テレコムしよう。

コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは
お客様センターへどうぞ

 **0088-82** (無料)

(受付時間) 9:00~23:00 (年中無休)

(インターネットホームページ) <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は **0041**、市外電話は **0088** でテレコムしよう。

寺院紀行

寺に歴史あり。

人々に信仰あり。

日本の、心の故郷を紀行する。

東京大仏

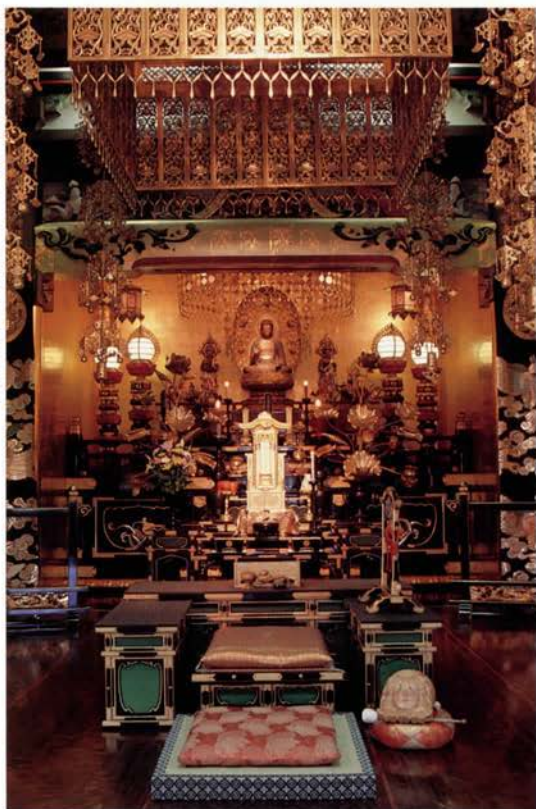
乗蓮寺



本堂（写真下）と乗蓮寺第二十五世
若林隆壽住職。住職の奥に見えるの
が東京大仏



安土桃山時代頃の作とされる本尊、阿彌陀三尊



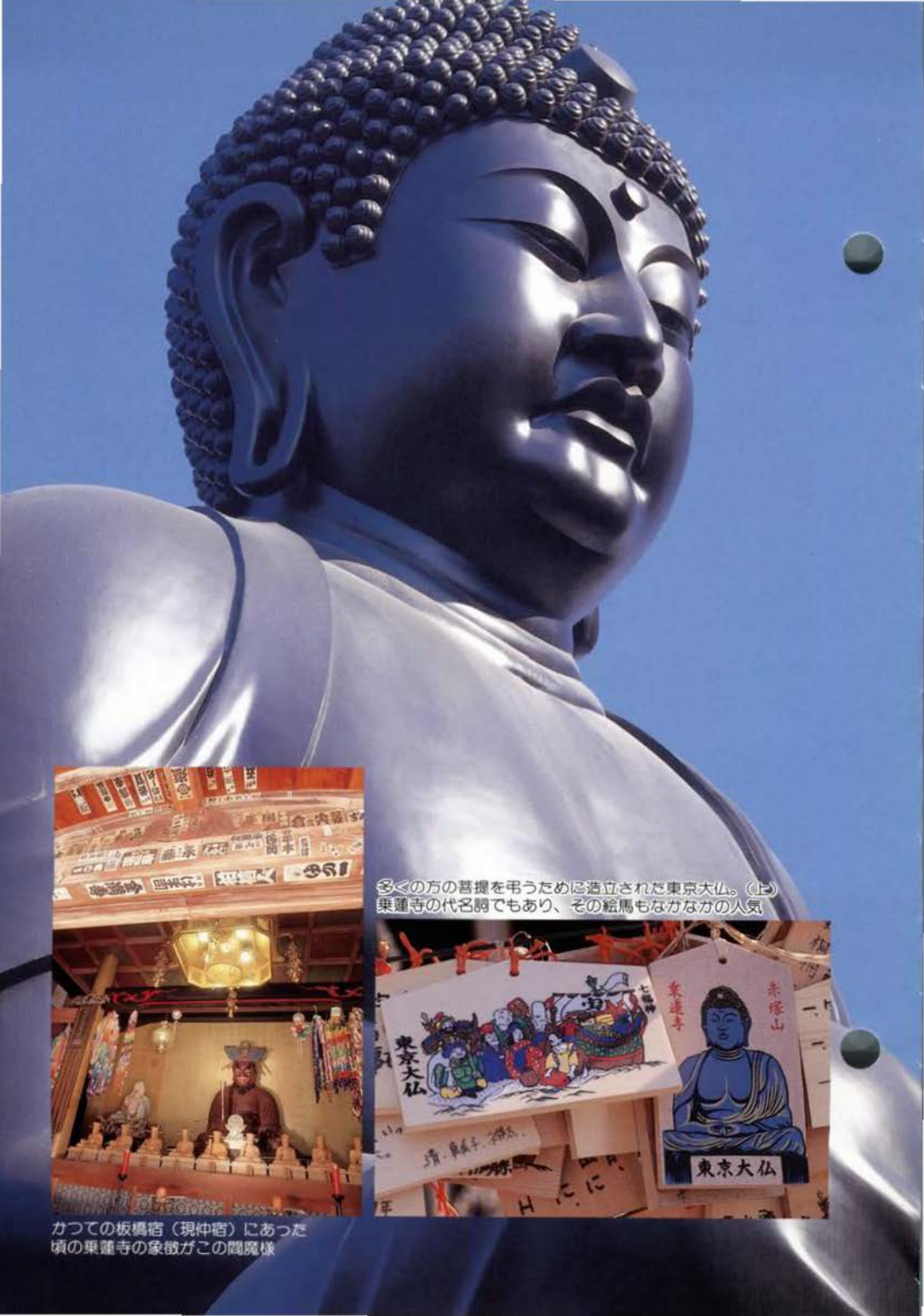
東京大仏
乗蓮寺



客殿から眺めた庭園風景



冒険家として世界的に有名な植村直巳さんの墓。
植村さんは板橋に住んでいて、乗蓮寺の檀家



多くの方の菩提を弔うために造立された東京大仏。(上)
乗蓮寺の代名詞でもあり、その絵馬もなかなかの人気



かつての板橋宿（現仲宿）にあった
頃の乗蓮寺の象徴がこの閻魔様



写真を撮るのが趣味という
若林隆壽住職と住職が撮影
した「桜の乗蓮寺本堂」(下)



団地の町として有名な高島平はすぐ
近く



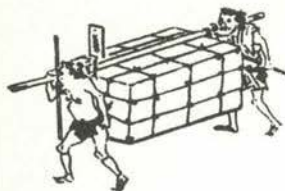
乗蓮寺からすぐの板橋区立郷土資料
館に残されているかつての板橋。現
在の地名はこの橋から生まれている



浄土

1999/3月号 目次

カラーグラビア寺院紀行「東京大仏 乗蓮寺」……写真＝タカオカ邦彦	3
不思議な「声」	若林隆壽 8
今月の表紙	三浦功大 15
合掌する心	佐藤良純 16
寺院紀行「東京大仏 乗蓮寺」	真山 剛 20
連載 民間の伝統芸能と宗教 最終回	川元祥一 32
仏教相談	大室了皓 38
御法語に聴く	小村正孝 42
桜餅うららうろうろ	大畑 等 48
さんぽの達人	山本勝之 58
Jフォーラム	63
事務局だより	69
編集後記	70



表紙題字＝浄土門主 中村康隆親下

表紙撮影＝三浦功大

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

不思議な 声

若林隆壽

昭和五十八年、ベトナムに後押しされたヘンサムリン政権の下で、カンボジアの内戦は一時小康状態に入り、密林の中の仏教遺跡、アンコール・ワット、アンコール・トムなどが、久しぶりに西側の報道陣に解放されることが決定しました。

アンコール研究の第一人者、上智大学の石澤良昭教授を団長に、テレビの在京各キー局の特派員、新聞・雑誌・ニュース配信会社の記者やカメラマン、美術館の学芸員等、様々な分野の人々によって、直ちに訪カンボジア団が組織され、幸いにして私もその一員に加わるようになりました。

自らの政権の正当性を、高らかに謳い上げようとする当時の政府は、我々をあたかも国賓のように厚遇しました。宿泊施設にはシアヌーク殿下の旧別荘が充てられ、食事もカンボジア庶民の生活からはかけ離れた贅沢なものでした。しかし、政府のプロバガンダとして、初めのうち見せられるのは、映画「キリング・フィールド」ですっかり有名になった、ポル・ポト派による大量虐殺の現場や強制収容所の跡、数限りなく積み上げられた頭蓋骨の山ばかりでした。

そして、その予期せぬ事故は、カンボジアに入ってから数日後、ようやく実現したアンコール・トムの遺跡、バイヨンの見学中に起こりました。

もともと産業の中心は農業であつた上に、ポル・ポト派によってほとんどすべての工業施設が破壊されたカンボジアの空は、「吸い込まれそうで怖い」と表現したいほどに、どこ

までも蒼く、一息毎に肺に吸い込まれる空気は、身体中の血液を浄化し、エネルギーがふつふつと沸き上がるのが実感されました。

政府から許された撮影時間はわずかに二時間。朝から興奮していた私は、愛用の一眼レフカメラ二台を持ち、バッグにありったけのフィルムを詰め込むと、遠足に来た子どものように遺跡の中を走り回りました。

バイヨンの階段を駆け上がり、ひたすらにシャッターをきり、回廊から回廊へと飛び移ろうとした、その時です。アツと思ったとたん、身体はすでに空中にありました。もうくなっていた足場の石が崩れ、その石もろともに墜ちたのです。高さは六〇七メートル、二階家の屋根ほどもあります。

思いもしないことが起こったのは、身体が宙にフツと浮いた瞬間でした。墜ちているのはこの自分なのに、その「墜ちていく自分」の姿がスローモーション・ビデオを見るように、はっきりと見えるのです。次には、非常に敵かな調子の重低音で、不思議な「声」が聞こえてきました。「身体を丸めろ。そうすれば助けてやる……」と。

見ていると、「墜ちてゆく私」はゆっくりと身体を丸め、右の腰から大きな石に叩きつけられ、さらに肩などを打ちつけながら、斜面を転がっていきました。平らな草むらまで転がりきったところで、私の姿は、私の視界から消えました。

上の方からは、日本から同行した記者、あるいは戦地から戦地へと巡り歩いているカメ

ラマンたちの「下は石だぜ。死んだな」とか、「この高さじゃダメだなあ」などという、妙に冷静な会話が聞こえてきます。その会話を耳にしなが、猛烈な痛みに、私は「ウォー」と叫び声を上げました。

「おつ、大丈夫だ、生きてる生きてる！」と言いながら、日本電波ニュースの駐在員が駆け寄り、私を抱き起こすと、首筋にすばやく水筒の冷水をかけてくれました。そこでようやく、自分自身「取り敢えず生きている」と確認ができたのでした。

右手はダラリと垂れ下がって力が入らず、腰から下は重く、感覚がひどく鈍くなっています。我々を迎え入れたカンボジア政府の若いスタッフがいろいろと尽力してくれましたが、現地には病院らしい病院はなく、治療らしい治療は何も受けられぬままに時間だけが過ぎていきました。寝かされた宿舎の窓から、空いっぱいの燃えるような大きな夕日が差し込み、しばらくの間部屋全体をオレンジ色に染め、その間は心安らいでいましたが、やがて裸電球が一つだけ灯る、重く沈んだ夜を迎えました。

トイレに行きたくても立ち上がることができず、借りたアルマイトの、でこぼこしたボールを左手で握りしめながら用を足すと、トマトジュースのように真っ赤な、ドロリとした小水が出ました。

長年夢に見たアンコールの地に立てたことで、はしやぎ過ぎてしまった自分を責めながら、このまま異国の地に果てるのか、生きて日本に帰れたとしても、身動きのとれないこ

の身体はどうなるのか、留守宅の家族は今後どうして生活していくのだろうか等々、ただ悔し涙だけが、次から次へと頬を熱く濡らしました。

しかし、そうした中でも、私の心に引っかかっていたのは、今日確かに見た「墜ちていく自分」の鮮明な画像と、「助けてやる」と言った神秘的なあの「声」の存在でした。なぜ「墜ちていく自分」が見えたのか。「助けてやる」と言ったのは誰の「声」だったのか。容易にその答えは見つかりませんでした。

翌々日、プノンペンの病院に移送された私を待っていたのは、真つ暗な部屋に置かれた恐ろしく旧式なレントゲンの機械と、フランス語とカンボジア語を話す、まだ少年のような医師でした。私の知っているフランス語とカンボジア語といえば、ともに「ありがとう」を意味する「メルシー・ボク」と「アールクン・チェラン」だけ。唯一動く左手に鉛筆を持ち、身体の絵を描いて印を付け、そこを指差しては「アイ ハヴ ア バイオレンス エイク ヒアー！ アウチッ！ ペイン！ 痛いっ！」などと、大学受験の基本英文のテキストを思い出しながら、必死の形相で訴えました。

その甲斐あってか、童顔の医師は、右肩と腰のエックス線撮影をし、とても飲み込めないほど大きなカプセルの鎮痛消炎剤を処方してくれました。さらには、その病院にただ一台あった、これまたフランス人サイズの車椅子を貸してくれました。政府もこの事故が悪いイメージにつながっては大変と考えたのか、四六時中、二人の若者が交代で車椅子を押

し、何から何まで私の面倒をみてくれました。その過保護ぶりに、読売新聞の記者は「カンボジア政府の西側への気の遣いよう」という記事を書いたほどです。

残念ながら、そのフランス製の旧式な機械で撮影したエックス線フィルムは、現像が間に合わず、カンボジアにいる間に結果を聞くことはできませんでした。身長百七十センチ程の日本人には十二分といえる量の痛み止めは、劇的な効果を現し、三日目には竹の杖をついて歩くところまで回復し、私は一日中「メルシー」と「アークン」ばかりを言い続けることになりました。私の墜ちる現場に居合わせていた報道関係者たちは、自力で立つて歩いている私を見て、目を丸くしながら、皆口々に「アンビリーバブル」「信じられない！」を連発したのでした。

成田に着いた翌朝、友人の紹介で訪れた日本の病院。近代的な設備が調い、わずか数分で現像できるエックス線フィルム。その場でモニターの見られる超音波診断装置、コンピュータによる断層撮影。日本語の通じる医師。そこで受けた検査の結果は、単なる打撲^{だぼく}。骨折もなければ、内臓の損傷も一切ないという診断でした。

これには、当の本人も驚きました。自分の墜ちた所を下から見上げ、その高さに一時は死さえ間近に感じたはずだったのに、何だか拍子抜けするとともに、本当に「助かった」と、今度はうれし涙がこぼれてきました。

その日を境に、私はそれまで五分刈りほどにのばしていた髪を、剃刀^{かみそり}できれいに剃^そり上

げることになりました。それが「助けてくれた」あの「声」に対する、ささやかな恩返しのように感じられたからです。

それから数年後、立花隆氏が『文藝春秋』誌に「臨死体験」や「幽体離脱」のことを連載し、NHKがスペシャル番組でそのことを取り上げるまで、私はこの不思議な体験を誰に話すこともできず、悶々とした日々を送っていました。と言うより、自分自身、自分の体験したことを科学的に認められない、という悩みの中でもがいていたのです。

いまや、そのメカニズムはどうあれ、「臨死体験」も「幽体離脱」も、誰にも起こり得ることとして社会的に認知されました。善導大師や法然上人も体得された「実際に極楽にいるような心地」という「三昧発得」の境地が、このようなことを指すのかどうかは、修行未熟な凡人の私には、まったく判断のつかないところです。しかしながら、自らの経験を通じてただ一つだけ言えることは、あの日以来、私は「南無阿彌陀仏」とお称えすることに、何の抵抗もなくなったということです。いや、むしろ積極的に「南無阿彌陀仏」と称えずにはいられない、とさえ思えるようになったのです。

不思議なことⅡ思議すべからざること。人間があれこれ考えてはならないことが、世の中にはまだまだあります。それをオカルト的に吹聴することは許されませんが、仏智（仏さまの尊いお智慧）は必ずどこかで働いていると信じています。

今月の表紙

多頭

蓮

LOTUS

3月

池の中に蓮華あり

大如車輪

青色には青光あり

黄色には黄光

赤色赤光

そして白色には白光ありて

微妙香潔なり

舍利弗よ

極楽国土には

かくの如くの

功德莊嚴が成就される

・

蓮華

この不可思議

たとえ七寶池八功德水なくとも

小さな泥田に

咲く

美しく咲いて

いる

古記事と蓮

文献に見える最も古い蓮の記事は、『古事記』の引田部の赤猪子の歌であると思います。

日下江の入江の蓮、花蓮。身の盛り人、羨しきろかも

雄略天皇が美和河に遊行されたとき、一人の童女に「汝嫁がずにあれ、今喚してむ」と仰せられたので、約束を待ち続け八十歳になった赤猪子が、天皇の宮居に参上、再会をはたした時に、天皇が大変驚き気のどくに思召され二首の歌を賜りました。その御歌に答え奉った中の一首で、『古事記』には「かれ赤猪子が泣く涙に、その服せる丹摺の袖、悉に湿れき」と記しています。

表紙写真と文

三浦功大

1942年 宮城県登米町生。蓮に関する総合誌「蓮の居」を毎年発行・責任編集(現在3号までに至る)していることをはじめ、展覧会、講演会、その他イベントなど精力的な活動を通じ、蓮を軸とした多くの文化人の結集を実現させ、注目を集めている。主な写真集、著書に「JAZZ in JAPAN 1963-1974」(西田書店)、「蓮の文庫史」(カド館房)などがある。

合掌する

心

佐藤良純

「ヒト」はいつから二本足で立ち、残りの二本を「手」として自由に使うようになったのでしょうか。樹の上に住んで、しっかり枝をつかんでいた「手」。四本の足(手)をフルに動かして野山を走りまわっていたころ。そして「ヒト」の祖先は、或る日突然、二本足で立ちあがったのでしょうか。「ヒト」は、二本の「手」を歩くこと以外に使うようになって、ほかの動物を越えて、地球上の王者になったと言われています。

古代インドの言語の一つ、パーリ語では、「象」のことを「ハッティン」と言います。英語の「ハンド」と同じ語源のことばで、「手」もつもの」という意味です。たしかに、象は長いハナを器用につかって、たくみに食べ物をつたべ、水をすいこんでは自分の背中にかけて水あびをします。材木を運ぶのもハナです。これを見た、古代インドの人々が、象のハナは「手」であると考えたのです。

しかし人間は「手」をつかって、いろいろ

なことを始めました。道具を造り、火をおこしました。火は人間の生活を一変させました。それから人間はより大きな集団になり、今日では何十億の人々が地球上に暮らしています。人間の集団が大きくなり複雑になると、「手」は実用的な側面に加えて、象徴的な意味をもつようになりました。

「手」をめぐるいろいろなことばが生れました。その中で、「にぎりこぶし」のことをとりあげてみたいと思います。ぐつとにぎった「手」つまり拳固(拳骨)です。この「にぎりこぶし」が経典の中に登場します。

マハーパリニッバーナ・スッタは、「大般涅槃経」と訳され、ブツダ最晩年の旅から、クシナガラでの逝去、葬儀までを記した経典です。ブツダの入滅は、仏教徒にとっては永遠に忘れることのできない一大事ですので、パーリ語原典や、漢訳経典など、九種の典籍が伝えられています。

この中に、病にかかったブツダが、やや回

復したとき、侍者のアーナンダが、「尊師は教えを我々に述べつくさないあいだは、逝去されないと確信しています。」と申しあげると、ブッダは、「修行僧たちよ、あなたがたはこれ以上、わたしに何を求めるのか。わたしは内外のへだてなく、ことごとく教えを説いてきた。私には、何ものかを弟子に隠すような師匠のにぎりこぶしはない。」と答えられたと言う一節があります。

当時、佛教以外の宗教思想家の中には、「教師のにぎりこぶし（握拳）」なるものがあって、若い時はだれにも話さないで、後に死の床についた時、氣に入った弟子にのみ、秘密の教えを伝えることがある。しかしブッダには、これを年老いてから、後の機会に話すことにしようと言って、こぶしの中に隠しておくようなものは何もないと言うのです。

この話しは、「ミリンダパンハ」という、西インドに居をかまえていたギリシャ系の王、ミリンダと、ナーガセーナと名のる佛教の比

丘の問答集の中にも出てきます。ギリシャ流の思想を背景にしたミリンダ王が、「人間とは何か。」「靈魂はあるのかないのか。」「この世界は有限か無限か。」など次々に難問をもちかけるのに対し、ナーガセーナ比丘がその一つ一つに譬えをまじえながら答え、王を納得させるというすじ書きです。この中でミリンダ王は、「ブッダは、如来（完全な人格者）のもろもろの教えにおいては、隠して教えない『師匠の拳』は存在しないと言いながら、弟子の質問に答えていない場面があるではないか。」とナーガセーナ比丘を問いつめます。ナーガセーナは、ブッダは単に解答を示さなかつたり、教えを隠したわけではなく、答えるべき理由のない問題、例えば、「人の死後の世界は存在するか」を考えてみても、それは、日常生活には何の役にもたたないし、悟りへの道にも役にはたたないものだと言明します。

「師匠の拳」は、このほかにも、ジャータカ（本生話）の中にも出てきますので、この

時代のインドではよく用いられていた譬喩なのでしよう。事実、ウパニシャッドという、インド哲学の伝統派の書物の中に、師匠が弟子に奥義を伝える場合には、近くに坐って、（ウパニ近く、ニシャッドニ坐る）人に知られないように話さなければいけない、と書かれていますので、佛教以外の教えでは、ごく普通のことだったのかも知れません。

たしかに人は緊張した時は、知らず知らずのうちに、にぎりこぶしを作り、手にあせにぎるといふ状態になっています。小さい頃、一〇〇円玉をいくつかににぎりしめて、欲しいものの買いに行つた経験は誰にもあります。大切なものを人に知られないように、じつとにぎりしめたくなるのは、人間の本能かも知れません。

でも、人間はいつも拳固を作つたままで生きていくわけにはいきません。たなごころを開いて人と接する時、親子、兄弟姉妹だけでなく、先輩、友人たちとも親愛の輪が生れて

てきます。握手は、互いの手の中に、相手を傷つけるなものも隠し持っていないことを明すためにある、と聞いたことがあります。

そして更に私たちは、両方の手を開くだけでなく、たなごころを合わせ、合掌することが大切です。堅くむすんでいた指を一本一本開き、両手を合せること、そして口に南無阿彌陀佛を称えることで、この世はよりなごやかで平和になり、争いごとは消えてゆきます。「師匠のにぎりこぶしはない」、二千五百年も前に、ブッダはこう説いています。

インドの人々の毎日の挨拶は、「ナマステ」、それは合掌に始まります。

合掌念佛の心を忘れないようにしたいと思います。

（大正大学教授）

寺院紀行

東京大仏

乗蓮寺



乗蓮寺の東京大仏は適立当時は奈良、鎌倉につく大きさだった

文／真山剛
撮影／夕力才力邦彦

昭和五十二年四月、日本で三番目に大きな大仏に魂が入れられた。身の丈八メートル、台座からの高さ十三メートル、重さ三十二トンの大仏である。

京都の城陽市で鑄造された大仏は、仏舍利が八つに分骨されたことにちなみ、八つの部分に分けられて東海道をのぼり、武蔵野の面影が色濃く残り、かつての関東の雄であった千葉氏の居城、赤塚城の二の丸跡で組み立てられた。

武蔵野を見渡せる小高い山の頂きに造立された大仏は奈良、鎌倉に次ぐ大きさの大仏で、その名を東京大仏という。今でこそ越前に大きな大仏ができ、日本で三番目ではないものの、首都東京ではないまでも一番大きな大仏である。今回の寺院紀行はこの東京大仏をシンボルとする名刹、乗蓮寺を訪れた。

乗蓮寺は東京都板橋区赤塚にある。団地で有名な高島平と光が丘の間に位置し、東京の北西、埼玉県との県境に近いところだ。

寺の裏手には赤塚城の本丸跡、そして赤塚溜池公園、郷土資料館正面には植物園や不動の滝と昔ながらの武蔵野の面影がここかしこに点在する東京でも静かな所である。

しかしこの乗蓮寺はもともとこの地に建立された寺院ではない。昭和五十年に、同じ板橋区仲宿から移転してきた寺院である。仲宿は中仙道の最初の宿場「板橋」にあり、江戸時代は宿場町として大



階段下から見上げる仁王門は唐木造銅板葺で、東福寺様式の青銅製仁王尊像が安置されている

いに賑わった町である。もともと乗蓮寺はその宿場町の代表的な寺院として庶民信仰の中心となっていた寺である。また江戸時代、乗蓮寺は將軍の鷹狩の休憩所にもなった名刹だ。その名刹が移転とともにシンボルとしているのが、この東京大仏なのである。

大仏といえはすぐ奈良、鎌倉、そして新しいところでは越前の大仏を思い出すが、この東京大仏には他の大仏にはない特徴がある。

実はこの特徴こそがこの東京大仏を建立した今は亡き乗蓮寺第二十三世若林隆道住職の発願の心なのだが、その心を第二十五世の若林隆壽住職がこういう話で伝えてくれた。

「よく電話で『東京大仏を見に行きたいのですが、場所を教えてください』という問い合わせがあります。そうした時、私は『東京大仏はお参りしていただく仏さまですので、見学することでしたら、場所はお教えないしません』と答えるのです。そうすると『失礼しました東京大仏をお参りに行きたいのですが……』と言い換えられます。そこで道を教えて差し上げるようにしています」

なるほど、見に行くのでなく、お参りに行くのが東京大仏なのである。問い合わせするほうもお参りに行くつもりながら見に行くこと表現した方もあるだろう、そう思うとちょっと厳しい答え方だなと思う。まして現住職の若林隆壽住職は今年四十三歳。その歳を考えると余計にその厳しさに目が向いてしまう。

東京大仏の後ろには板橋信濃守の墓がある





安田毅彦筆で「吉水の庵」と題され
た法然上人像は寺宝のひとつ

しかし、よくよく考えればこういうことは大切なことである。私たちの意識の中で神社仏閣や仏像といったものが、どう位置付けられているか、単なる表現のミスで済ませるのは少々安直に過ぎるかもしれない。世の中が何かと「まあまあ」で済ませる風潮の中で、たとえ相手が誰であれ、住職として信仰の対象物を明確に意識させ、かつ適切な表現をすることの大切さを伝えるのは、単に住職ということだけでなく一宗教者として必要なこともある。身の回りの小事を整えてこそ、それが大事へと膨らんでいく、そう思うとむしろ厳しいと感じるこちらに問題があるということだ。

話を戻そう。そう東京大仏はあくまでお参りしていただく仏さまなのだが、その原点は発願した隆道上人の実体験から生まれたものだという。

隆道上人は明治二十一年長野県生まれ。幼児の頃より神童の誉高く、長じて東京浅草の誓願寺に入る。そして台湾へ渡航し一寺を建立した。大正六年に帰国、東京下谷西念寺に入る。その後浅草の西光院をはじめいくつかの寺に住したが、ここで関東大震災と第二次世界大戦を経験する。

大仏造立発願の原点はこの第二次世界大戦、昭和二十年三月十日の東京大空襲にあるという。

当時浅草にいた隆道上人は既橋へ逃げたが、そこで体験したもの

板橋区立郷土資料館の前にはかつての板橋宿にあった廓の門が残されている



はまさに二河白道そのものだったという。

二河白道とは右には激流、左には猛火が迫る一筋の白い道を極楽浄土に向けて歩いて行くという中国浄土教の普導大師のたとえ話だが、隆道上人はこの左右の地獄をこの世で体験したのである。

戦争体験のない者には想像しかできないが、空襲にあった東京はまさに地獄絵図そのものだったに違いない。

燃えさかる火、水を求めた人々であふれかえった川、その地獄絵図の中で苦しみもがき命を亡くしていった人々の姿が、隆道上人の脳裏から消えることは生涯無かったに違いない。東京大仏はそうした戦没者、被災者のために造立されたのである。人々が知らず知らずのうちにでもよいから、そうした人たちのために手を合わせてもらえるモニュメントを作りたい。こうした強い意味が東京大仏の造立の根底にあったのである。

もちろん奈良や鎌倉の大仏も鎮護国家や国家安泰の願いが込められた仏像であるが、東京大仏はお参りの対象をより具体的に意識した仏像なのである。若林隆壽住職はこう続ける。

「あくまでお参りの対象ですから積極的な宣伝は一切しません。テレビなどのロケもすべてお断りしています。意図していない違うイメージをつけられては困るからです。」

一度だけ雑誌のグラビアに協力したことがありました。高級車の



板橋宮（現中宮）にあった頃の乗蓮寺。衣姿は第二十三世であった故正尊隆道上人

紹介で『大きいことはいいことだ』というイメージを東京大仏と重ねたものでした。ですがこれも諸事情あつての協力でした」

あくまでお参りしていただく東京大仏。この隆道上人の想いは変わらず伝えられてきているのである。

移転後はこの東京大仏がシンボルとなつた乗蓮寺だが、移転前のシンボルは閻魔様で、現在仁王門の階段下にある閻魔堂に十王像を従えて鎮座している。仲宿の頃はこの閻魔様へのお参りが絶えなかつたという。

室町時代の応永年間（一三九四～一四二七）に英蓮社了賢無的和尚が山中（現在の板橋区仲宿）に創建した乗蓮寺は江戸時代に板橋宿（現在の仲宿）に移転、徳川家康から朱印地を寄進され、日本橋からの次の宿場町として栄える板橋の名刹となつたが、宿場町と閻魔様は切っても切れない関係にあるという。

宿場につきものの花街、そこで働く花魁おいらんは客をひくため、承知の上で嘘をつく。そこで閻魔様に引き抜かれる舌の代わりにこんにやくをお供えた。またこんにやくは困厄とも通じる。花魁にとつては閻魔様にお参りすることで自分の罪深さを軽くしたり、あるいは不遇なその身を良くしたりと願っているのである。かつての江戸四宿のひとつ内藤新宿にやはり太宗寺という浄土宗のお寺があるが、ここのシンボルもやはり閻魔様で、宿場町に閻魔様は欠かせない存

境内にある赤塚城一の丸跡の石碑。
本丸跡は広場になつている



在なのだ。

さらに乗蓮寺を有名にしたのは八代將軍吉宗が鷹狩りに出る度にこの乗蓮寺で休憩し、食事をしたことだ。以後將軍の休憩所となった乗蓮寺は葵の紋をいただき、朱印状を賜る寺院となったのである。現在も寺宝として残る三ツ葉葵高蒔絵の膳碗一具はまさにその名残である。

この由緒ある乗蓮寺が移転を始めたのは昭和四十六年から。境内地の大半が主都高速五号線の計画地に墓地がかり、やむなくの移転となった。八十歳を越えた隆道上人がこの移転を決定、晩年の大事業となった。

寺院の移転は普通の住宅と違い、非常に大変だ。ましてや乗蓮寺のような名刹で、しかも多くの檀家を持っているとなると、並大抵ではない。檀家の意見すべてをまとめなくてはいけない上に、移転場所も問題となる。

当初、同じ板橋区内に予定したものの地元の反対にあつて計画は中止、それでは埼玉に、という時に当時の区長がこういつてくれたそうである。

「板橋の祖でもある板橋守いたばしのかみを守るお寺がこの板橋区から出ていってもらつては困る。なんとか区内に」と。

そうしてこの赤塚の地を候補地として応援してくれたという。そ



乗蓮寺の目の前にある植物園



広々とした境内

が労働に直結しているわけではないが、何かの形で労働の文化の要素をもつことで根強く民間に残り、広がった原因ではないか。

私はここ数年、各地の民間芸能や民俗芸能を調査して歩いているが、その実感からすると、日本の仏教の、すべての教団をあわせても、呪術を前提とした民間芸能の方が広く、かつまた根強く存在しているのではないかと。

ところで、ここでのいう類感呪術はシャーマニズム以前のアニミズムとして存在するといつてよい。だからこそ私は、これらを大切に、軽んじたり否定するのではなく、発展・変革を考えてじっくり見直したいと思うのである。そしてその私の心の内にひそかに芽ばえるものがある。

前にいったとおりアニミズムは現代の普遍的宗教といわれるキリスト教の「神」や、仏教における「仏」の原点にあったのではない

か、とする考え方が最近の文化人類学で語られている。私も各地の民間芸能を調査して、てそのような実感をうけるのである。

そしてその実感をもとに考えるのであるが、「仏」というのは、自然界の生命力、あるいは宇宙がもつ生命力、なぜかわからないが植物を生かし、動物を生かし、人間を生かしている宇宙や自然の不可解な生命力を感じ取って、それを抽象化したものではないか――。

私の主観なのであるがこんなことを勝手に考えてみている。そして弥陀の本願に帰依する「ナミアミダブツ」が、文字ではなく音として、文字を使わなかった多くの人々の心に入ったのは、その前アニミズムがあつたせいではないか。

民間芸能はまた一方で、能楽や歌舞伎・文楽などに変つてゆく。ここでは「神」や「仏」ではなく人間の愛や苦悩を描く芸術へ変つた。

Q

&

A

読者の疑問に
大室了皓師が答えます

仏教相談



菩提寺の墓に入れてもらえないのですが……

いつも興味深く読んでいます。

先日、義理の妹が亡くなったことで、大きな問題が起きています。どうかよきアドバイスをお願いいたします。

問題というのは、義妹がキリスト教でお葬式をしてもらったことから、菩提寺で納骨を断られた、ということです。

義妹は、その夫が亡くなった後、友人に誘われて教会にいくようになり、やがて洗礼をうけました。見ていても立派なキリスト教徒として、夫なきあとを過ごしていました。が、納骨ということでこんな問題が起きるとは夢にも考えていなかったようです。

お寺のご住職は、キリスト教徒を仏教のお墓に納めることはできない、もし、納骨するのなら、もう一度仏教でお葬式をしなければならぬ、といます。そのことについては、ご住職の言い分のほうが筋が通っている、と義妹の家族や親類もいって納得できるのですが、彼女の夫はそのお寺のお墓に眠っています。どこかにお墓を求めてもバラバラになりますし費用もかかります。どうしたらいいでしょうか。

友人の寺を訪問して驚きました。

客間に牧師さんがいてお祈りをしていました。その席には彼のご両親を初め家族が揃っていました。

お寺ですから当然のことながら、彼の父は住職で彼は副住職です。

その日は彼の亡兄の命日でしたので、そのお祈りが牧師さんによって行われていたのです。

お寺で牧師さん。

不審に思つて訊ねたところ、午前中には本堂のご本尊の前で、住職であるお父さんを初め、みんなでお経を上げてご供養したと言います。

ますます分からなくなってきました。

仏式でのご供養が済んでいるのに、なぜ再びわざわざ牧師さんを招いて、キリスト教のお祈りをするのでしょうか。

実は、彼のお母さんはクリスチャンだったのです。そういう方がどうしてお寺へお嫁に

来たのでしょうか。

彼は幼い時から、本尊様にお茶とご飯をお供えし、南無大師遍照金剛と唱えてから、居間のキリスト様にお祈りしているお母さんの姿を見て来ましたので、何の違和感も持っていませんでした。

「考えれば変わった寺だね」とは言いましたが、お父さんも子供たちも、そうしたお母さんを咎めることもなく、極めて和やかな家庭でした。

私は、信仰の違うお母さんを暖かく見守っている住職である彼のお父さんのおおらかなお人柄に深い敬意を抱き、神様仏様と拝む対象は違つても、みんなが仲良くするためにこそ宗教はあるんだ。大きな心で見なければ、神様仏様に叱られるかもしれないと思つたのです。

さてご質問では、弟さんは仏式で葬儀を行い、お寺の墓地に納められている。

その妻で貴方には義妹に当たる方が、ご主

人亡き後に洗礼を受けキリスト教信者となったので、葬儀は教会で行った。

そうして、ご主人が納まっているお墓へ納骨しようとしたら、ご住職から仏式で葬儀をあらためて行いなさいと言われて困った。

ということですが、「この墓地は、この寺の檀家の人達のためのものである。従って異教の人は困る」というご住職のお考えは当然だと思います。

私の寺にも似たような例があります。

ご主人は浄土宗の信者ですが、夫人は洗礼を受けキリスト教の信者となっていました。

そして亡くなりました。葬儀は教会で行いました。遺骨を抱えたまま十ヶ月ほどして相談に来ました。私はご主人の懇願に応え入檀を認めました。そこで本堂で葬儀式を兼ね一周忌の法要を行い新しいお墓に納骨しました。

遺骨を抱えて困っていたご主人は、これで家内は安住が叶い幸せです、と喜んでくれました。

貴方の場合も、ご住職のお考えをよくお分りになっていくようです。特に反対している方はないようです。

もしそのようなら、ご住職のお言葉に従って、そのお寺の本堂で葬儀式を兼ねた法要を行って頂いたら如何でしょうか。

改宗に拘っておられるかもしれませんが、改宗はどの宗教でも行われています。特にヨーロッパや中近東では、異教の人を時には武力をもって、生前は勿論のこと死後の改宗までも行われています。

だからその真似を、と言うのではありません。みんなが仲良く将来まで円滑に物事が運ぶことが出来る道をお選びになる事が大切だと申し上げているのです。こじれる事は亡き方も決して望んではおられないでしょう。

遺言でも、残された子供達が争うことになるものであったら、それを回避するための修正は、故人も喜んで下さると信じます。

ただし人の死の縁は、かねておもうにもかない候わず、にわかには大路みちにて、終わる事も候。

又大小便利のところにて死ぬる人も候……さようにして死に候とも、日ごろの念仏申して極樂へまいる心だにも候人ならば、息のたえん時に、阿弥陀・観音・勢至・来たりむかえ給うべしと信じおぼしめすべきにて候なり。

【往生浄土用心】

おもいは浄土へ

人が死ぬ時のことなど、日頃考えているとおりにいくものではありません。往來で突然倒れて死ぬこともあれば、お手洗いで用を足している最中に死んでしまふこともあります……たとえそのような死に方をしても、日頃からお念仏を称え、極樂浄土へ往生したいという心さえもっている人ならば、今、まさに息が絶えようとしているその時に、阿弥陀仏は觀音勢至両菩薩と共に迎えにきて下さると信じ、思い定めるべきです。

年があけて間もなくの日曜日、お檀家であるSさんの四十九日法要が営まれた。まもなく師走という頃、突然に逝かれたのである。本当に突然、そう、家族も知らない、ほんの一寸の間に……。夕刻、自転車で散歩に出掛けて不慮の事故に遭い、そのまま帰らぬ人となつてしまつたのだ。

まだ六十余歳。可愛い女の子のお孫さんらの手を引き、春秋のお彼岸、そしてお盆、お施餓鬼と、かならず墓参に見えていた。決して絶やしたことのない柔和な笑顔、控えめでやさしい口調……。その微笑みが、その言葉が、今も私の目前に、耳奥に、鮮明によみがえってくる。

自転車のペダルをこいでいたSさんは、その時、何を思い、何を考えていたろうか。少なくとも、すぐ前に、まさか「死」が自分を待っているなどとは予想もつかなかつたに違いない。お通夜の読経中、祭壇に飾られた写真——笑顔いっぱい——を前に、言いようのない哀惜の念がこみ上げ、つい声に詰まつてしまつた。

人は、他人の死によって「いのち」のはかなさを痛烈に教えらる。人の無力さにまざまざと気付かせられる。その死が突然のものであれば、衝撃はさらに増す。そして、かく教えられ、かく気付いた自分もまた、その他人と何ら変わらないはかない「いのち」であることを実感させられる。

しかし普段、私たちはどれほど死について考え、自らの死を見つめようとしているだろうか。近しい人の突如とした死から多くを学んでも、いったいどれほどの間、それをわが身に、わが心に留め置くことができているだろうか。

天を仰ぎ、地を叩くほどに号泣せしめたやり場のなかった感情も、案外刹那的であったことであとでふと気付くことがなくはない。脳裏のどこかに「自分だけは…」の慢心がかくれてはいないか。結局は「わかっていない」自分がそこにはある。

生——死。

誰も避けることのできないこの一連のプロセス。誰も避けられない

いからこそ、浄土は皆が赴くところであらねばならない。誰でも浄土でなければならぬ。それを切々と説き続けた法然上人であった。

冒頭の言葉は、日頃の称名念仏行が、そして浄土へ寄せる念がいかん大事かを訴えている。そして称名念仏こそは「わかっていない」自分を浮き彫りにしてくれるものとなる。

浄土への念が称名の声となって出るのか、称名となって出た自分の声が気持ちに浄土へ馳せしめるのか。

それはおそらくいずれが先で、いずれが後であつてもかまわない。念と声は一つの輪のようになって自分を取り巻き、そのまま阿弥陀・観音勢至ほか、あまたの菩薩の来迎をいただける自分となる。

冷たく乾いた初冬の空気の中で営まれたSさんのお通夜、お葬儀。あれからもう三ヶ月がたった。

気丈に式に臨まれた娘さん夫婦とお孫さんらは、毎日お仏壇の前にたたずみ、お線香をあげ、まぶたに浮かんだSさんの面影のなか

の頃の赤塚は「まむし注意」の札が立つ雑木林やさつきの養生地、畑の広がる所だったという。もちろんまわりには住んでいる人達がいる。引越すると同時に周りの公道の整備などいくつかの地元への協力も惜しまなかった。墓地も仲宿時代と同じ広さで移転。かつての伽藍の一部も使い回した。

そうした苦勞の末、昭和五十一年に移転、翌五十二年の東京大仏開眼と本堂落慶で新しい地での乗蓮寺の歴史を刻むこととなったのである。

移転を無事終えた第二十三世隆道上人は昭和六十三年に百歳で、第二十四世隆光上人は平成三年に遷化、そして現在では第二十五世隆壽住職がこの名刹の法灯を守っている。

先代の次男であった住職はゆえあってアナウンサー志望を断念、二十歳で僧侶になることを決意したという。

大正大学を卒業した四月に結婚、そして同大大学院に。大学院を修了した後、寺に入る前に出版社の編集部に三年間勤め、コンピュータ業務にも携わったという。

現在は乗蓮寺と浅草の西光院の住職をしながら、季刊誌『仏教と生活』に執筆、編集と実に忙しい。趣味は写真を撮ること、で、巻頭カラーページの桜の頃の本堂の風景は住職が撮影したものだ。

また、昨年から寺名に蓮が入っていることもあり、「蓮のフオーラ



高島平の地名はかつて高島秋帆が大砲を試射場としていたことによる

に称名していることだろう。Sさんが生前に残してくれた形ある、形なき多くのものを、そのたびに思い起こしていることだろう。

掌を合わせたその姿、その称名の声、自分を念じてくれているその心を、Sさんもまた、浄土から、やさしく見、聞き、念じているに違いない。

吹く風も日ごとに暖かさを増してきた。

まもなく、Sさんのはじめてのお彼岸がやってくる。

(小村 正孝)

〈訂正とわけ〉

前号「御法語に聴く」の文章中、35頁6行目と7行目の間に「仕事に励んでお給料をあげる」の一文が抜けていました。また36頁7行目「法然上人にも易しい行が」は「法然上人以前にも易しい行が」の誤りでした。ここに謹んで訂正させていただきます。執筆者、読者各位に御迷惑をおかけしたこと、お詫び申し上げます。(編集部)

桜餅

うらら

うろろ

横須賀洋子の
俳句の世界

大畑 等

内心を傾けてのむ寒たまご

胸襟を開くと花ひらがどつさり

仏壇で育つ菜の花月夜かな

いま私の手元に横須賀洋子の二冊の句集『叱言(こごと)』と『あんがい(案外)』があります。ここに載せる俳句はそこからとりました。冒頭の三句でおわかりのように、直ぐ響く俳句です。いい俳句は意味をたどる前に、なによりも響きます。本当は私の文章などは蛇足、素っ飛ばしてもらって句だけ味わってもらっても結構です。でもまあこれも読み物ですから語り手はあったほうが格好がつかます。下手な船頭の舟に乗ってしまった旅の人とあきらめて一緒に向こう岸まで渡って下さい。その前に

元旦や窓は四角ときめないで

このハートで気楽に行きましょう。私の頭がコチコチになったら、作者の句が救ってくれるでしょうから。

とりあえず鰯の口をふさぐこと

日に一度背骨を抜いて魚になる

黄水仙人間の声おことわり

この場合花も命も丸洗い

弘法も食べる正しい栗ご飯

ひよつとして皆さん、いま俳句だとは意識しないで読んでしまいませんか？ テレビの俳句番組にも新聞俳句欄にも出てこない、そんな俳句です。非常に新しい俳句だと思います。先生と呼ばれているテレビ・新聞の選者も編集者もアナウンサーも困るのではないでしようか？なぜなら作者の実生活の一端を切りとった俳句ではないからです。それに世の固定観念から遠く隔たった俳句だからです。

そうであるが、口ずさんでしまふ。ここが横須賀洋子の俳句の非常に重要なところだ。ほら、もう作者の俳句があなたの皮膚にベタッとくっついていないですか。

桜餅うららうろろ老婆なり

秋たたた たときてこんと石を蹴る

日傘ボキボキたたんでも自己不満足

たとえば月コチンと音のするところ

妻てすか梨をしゆるしゆるしゆると剝く

これらの句にみられるオノマトペ（擬音語、擬態語）は俳句では通常あまり使われません。オノマトペを使いこなすのはむずかしいのでしょうか。でも日常会話ではこれを使うと生き生きと話が伝わる場合があります。宮沢賢治の童話には到るところに出て来ます。

「ダー、ダー、ダー、ダー。ダー、スコ、ダーダー」、「トパアスはツアラツアラン」とこぼれて……、「カン、カン、カンカエコカンコカン

コカン」。横須賀洋子のこれらの句のオノマトペは賢治のそれと同じくゆるぎないものです。「秋たたた……」の句なんかは自動車を運転していて口に出て来ます。それに「日傘ボキボキ」は「自己不満足」という言葉を巧妙に支えていると思います。この句は次にもう一度とりあげてみます。

島田家山田家糞虫が生きる墓地

島国やあ幽霊の標準語

一読して笑ってしまいます。そしてハッとします。一句目では、大小の墓の林立する厳肅な墓地も糞虫にとつては単なる生きる場所に過ぎない、というアイロニーとなっています。二句目はどうでしょう。「幽霊の標準語」なんて、そんなものはありはしないでしょう。ありもしないものの具体性が、言い切り方が、とても面白いんですね。背景をいろいろと探ることが出来ますが、いずれにしろカラッと

しています。

小林一茶の句に「づぶ濡の大名を見る巨燵こたつ哉かな」があります。冷たい雨の中の参勤交替を俺は温かい炬燵に入って見ている、エライ人のやることは気の毒なことだ、と皮肉たっぷりに吟よんでいます。こういう批評精神が俳諧の心です。

俳句は、幽玄などの古典的美意識―和歌における雅語など―を町人階層の俗のエネルギーでもって価値転換させようとしたことに根をもっています。江戸時代の貨幣経済と商品流通の浸透は伝統的な自然観を壊しつつ、のり越えていったのです。

では現代はどうでしょう。江戸時代とは比較にならない程、物や情報が氾濫しています。火縄銃と核兵器の差を想像して下さい。それでいて、どうやら平和で、中流意識とかの訳のわからないもので、安心していい。ちよつと違うんじゃないの、と作者は考えた、かどうかは知りませんが。とりあえず句に行きま

しょう。

そこそこ不幸夜長湯舟の指の皺

日傘ボキボキたんでも自己不満足

うんと仕合せ死ぬときはもつと仕合せ暮

日傘ボキボキがもう一度出てきます。これ

らの句の面白さは、「そこそこ不幸」、「自己不満足」、「うんと仕合せ……もつと仕合せ」にあると思います。「そこそこ幸福」や「自己満足」

や「仕合せ」に対応するのですが、決して対立や否定などはしていないのです。「幸福」や「自己満足」や「仕合せ」のよって立つ土俵そのものも台無しにしてしまっているんです。一句一句に溢れる滑稽こっけいがそれを可能にさせているのでしょう。

じゃんけんぼん死ぬって返事をしないこと
由緒ある蟬と人との葬儀なり

これらの句も同じです。確かに、どんなに死を莊嚴にしつらえても、この世から見れば死は「返事をしないこと」に他なりません。それにしても「じゃんけんぼん」とは全く全く、あつ氣にとられてしまっています。二句目はどうでしょう。「蟬と人」と、蟬が先にきています。蟬も人も葬儀も更には「由緒ある」という言葉も足場を失つて宙に浮いてしまつてはいませんか。ロラン・バルトというフランスの批評家は、こうした俳句の世界に羨望のまなざしを向けています。ガチガチのロゴス（言葉）の国の人だからでしょう。残念ながら俳句の批判精神はくみ取っていないようです。

私はここまで来て、俗ということについて考えてしまいます。知ということについて考えてしまいます。鶴見俊輔という人は大衆文化についてよく発言をしています。彼は戦争中、アメリカに居ました。欧米から見ると日本は間違っている。彼は日本人であるにもか

かわらず、日本が負けることを願ったそうです。しかし日本に帰って、日本人の勝ちたい、勝ちたいという願いを肌と感じ、負けることを願った自分が瓦解したと、どこかの本に書いてありました。一言で言えない複雑な心境でありましょう。自分が外部に立つて、ものを見る「知」のあり方に彼は疑問をもったと思われます。「知」は「俗」の洗礼を受けねばなりません。知のあり方の困難さは同時に「俗」のあり方の困難さです。ちよつと一息入れますか。

立春大吉天衣無縫の二枚舌 天高く表裏一体の出し昆布

まさにこの句にあるように知と俗は表裏一体だと思えます。俳句は常に俗と離れてはあり得ないと私は思っています。「雅」という言語空間を突き崩すのは、経験的で具体的な「俗」であつたからです。

とは言っても「俗」という一般概念などはありません。俳句作家一人一人の問題だと思っています。作者の俳句に俗の一つのかたちを見ます。

穴子に莓似て非なるもの団子

戦争を忌避する蠅を雨に出す

近眼の蛍を連れて市役所へ

口語の強さをリズムにのせている俳句だと思えます。それぞれの言葉が何かに統治され、秩序をもって流れてくる、というイメージではありません。平行にパバツ、パバツと来ます。一語一語が主張します。ジェット機のイメージです。ジェット機のパーツはそれぞれ遠くに位置しています。尾翼、燃料タンク、エンジン、その他もろもろ。そのパーツのどつ一個が壊れても墜ちてしまいます。非常にスリリングなシステムです。そのようなイメージをこれらの句に感じてしまいます。作者

は止まっています。現実と伴走しています。止まると現実には先に行ってしまう。後ろから、外部から現実を見ることになってしまいます。それはもう現実ではありません。殻の被ったただのものです。

たとえば作者にサルビアの句が三句ありますが、年代順に並べてみますと

①サルビアの半身散って猛るいろ

②サルビアの拒絶のいろを育てます

③散ることがはかないのではなくザ・サルビア

①の句は昭和四十四年発行の『絆』に、②の句は昭和六十三年発行の『叱言』、③の句は平成十年の『あんがい(案外)』に収載されています。①の句では現在の作者の俳句に特徴的な口語の強さは見られません。それに「半身」という見立ての言葉と「猛る」という感情移入的な言葉が見られます。②では「育てます」と口語で終わっていますが、強さはまだ

うかがえません。それに「拒絶のいろ」という感情的な言葉があります。さて③になりますと、俳句の質そのものが前の二句と大きく異なります。「はかない」という感情語は少しも、はかなくはありません。それは「なく」という否定の言葉によるものではありません。最後の「ザ・サルビア」が全ての言葉を由に舞わせてしまうのです。「なく」までも意味を剥ぎ取ってしまっているのです。the Bookは聖書であり、神は自分のことをI AM THE I AM と言います。全く作者はイタズラ者です。卑小なサルビアにザを付けて神様の技を遊んでしまったのですから。

私はもつともつと句を紹介せねばなりません。

禁じられたウナギ斜めに横断中
しずごろなく赤ちゃんの初夏
古池や血筋正しき油揚げ

過ぎたるは生真面すぎる焼豆腐
命なりけり青森駅前焼鳥のタレ

もうおわかりでしょう。「禁じられた遊び」
「……しずごろなく花の散るらむ」古池や
蛙飛びこむ水のおと」等々のよく知られた語句を自分の俳句の中にとり入れていきます。句取り俳句ですね。私はこの手の方法はあまり好きではありませんでした。ごまかしに見えたのです。しかし作者のこれらの句を読んで、さらにはこの稿を書きながら、その意義が見えてきました。見た目には、よく知られた語句をポイントにして展開をしていく、その語句と他の語句との落差やぶつかりを楽しむ。そのように見えますがそれだけではありません。「私」というものを、よく知られた語句に紛れ込ませることもできます。そのことは自我というやっかいなもの、それに対する実験場でもあるのです。さらには、その語句をもとに読者との共通の言語空間かできていく訳

ですから、写生句とは全く異なる展開もできるのです。

スプーンの背から葬列がおりてくる

子が死んでも汗臭いわたしてあり

押入れをあけた角度で安住す

玉葱の輪の抜けざまの夫婦かな

米櫃に手を入れ手さぐりの浮世

臉拭き同居の蟻に一礼する

人參大根奥へどうぞと母の顔

米屋の隣の床屋のとなり芒原

にんげん座みかんせんべい草臥れた

こういう句を味わっていますと、生活のリアリテイのようなものが見えてきます。作者は日常を異化して表現することに相当力を入れていえると思われましますから、一筋縄で生活や感情をとらえることができません。またそこが作者の俳句の特徴であると言えるでしょう。せっかくだから女つばい句（常識から見ると全く女つばくありませんが）を紹介しよう。

と全く女つばくありませんが）を紹介しよう。

夫が他人になるとき皿の秋刀魚の眼

蜘蛛の子つぶし夜はくろくろ夫を待つ

かたつむり妻脱出用縄梯子

夫婦相和しこのごろの菊疲れたり

虫を飼うわたしひたすら賢夫人

枯れることを忘れ黄菊は衛生的美人

ホックとめはずしてはとめ女腐つ

魯迅に「詩人は神話の敵である。」という言葉があります。魯迅のどの本に書いてあるかはまだ突き止めていません。私流に解釈すれば、人は多くの神話（制度や因習など）の中に生きています。もし、それが人間を不自由なものにするなら、それを壊してしまふべきだ、ということだと思えます。言葉に関しても同じです。私は魯迅の言葉をもっと縮めて、「詩は神話の敵である。」と言います。洋子

俳句にその気概を見るのです。

冴返るうろこ千枚申告して

天には運をスーブには蚊を浮べ

柵内禁煙千鳥の鳴き声のみ許す

筍や悔い改めよ脱ぎ捨てよ

白なの赤なの無表情なのシクラメン

ふるさとは蝶に抱かれて繁殖する

曼珠沙華一本咲きぬ皆泣きぬ

こだまとなるたらいのなかの花のたね

鳥肌を叩き陳腐な血と思う

決心しなくても足の裏梅雨まみれ

手を拭いて葉を拭いて夕日を拭く

コケシにはない肋骨が汗をかく

易しい普通の言葉で俳句は作られています。それにもかかわらず非日常的な言葉となつて私達の心に届いてくるのです。どうやら、そこには作者の日常に対する、そして言葉に対する足の踏み込み方にあるような気がします。

一步、二歩とぐつと足を踏み入れています。

そこから生まれる具体性が非日常の顔をまとい現われ出ていると思われまふ。そしてそれが「俗」の、「知」のあり方のようにも思われます。最新句集の『あながい(案外)』からいくつか紹介します。

孤高なんて印度林檎を腐らせて

柿熟れる天に榮光地に平行

貞淑な毛虫そうかもと踏みぬ

キリン発「枯野でもいいから駆抜きたい」

葱坊主寝るときの手をどうしよう

散髪願望猿山にいて結構

旅人に土の効き目をきいてみる

食すれば狂う豆科に消費税

こんなにやくの無信心が身じろいて

秋風やメロンパイすぐアップルパイ

星まつり蛋白質のお通りだ

句集『あながい(案外)』のあとがきで作者

ム」の開催（本年の『浄土』誌の表紙撮影、三浦功大氏が主催している）に携わり、現在会場として乗蓮寺を提供している。住職としての名刺とともにプライベート用の名刺をいたいたが、住職が撮影したきれいな花蓮が写っている名刺だった。

その住職に目標を聞いてみた。

「私の人生で恩師といえる先生が二人います。共に学生時代の先生ですが、お二人とも私利私欲の無い先生でした。色々悩んでいた私に『自らを無にすること』を教えてくれ、利他を勧めてくれました。この他人に慈しみを持つて接する、他人の役に立つという教えは、祖父も父も実践してきたことでもあります。私もやりがいのある仕事としてこの利他行に力を注いでいくつもりです」

十数年前に新東京百景に都民の投票で選ばれた東京大仏。その大仏に込められた想いは間違いなく次の時代へと引き継がれている。

（ルポライター）



数年に及んだ天保の飢饉。飢えて倒れた人々を供養した塔が残っている

は次のように書いています。

(略) 現在、志ある仲間との勉強会を楽しんでいます。ただ、俳句と遊びたくても、真面目に勉強しないと、俳句の方が私と遊んでくれません。(略)

長旅になってしまいました。さて、ようやく岸へ着きます。その岸とは、どうやら「聖」なる岸のようです。聖と俗は今日ありきたりの対句ですが、そのように思えてきたのです。へたな船頭で申し訳ありません。腕のよい船頭は他にいっぱい居るのに、お調子者の私が臆をとってしまった非をおわびしなければなりません。こんな私を作者はどう思うのでしょうか。句集にこんな句があります。

捨鉢な勇氣枝豆がひゅつと

横須賀洋子略歴

昭和十一年一月三日、神奈川県横須賀市生れ。東京都の成人学級で西東三鬼の指導を受け、当初「断崖」に投稿。のち幡谷東吾を師とし、「花実」同人。昭和四十四年「俳句評論」同人。四十六年現代俳句協会会員。六十三年「花実」終刊。「未完現実」同人。句集「絆」(昭四四)、句集「叱言」(昭六三)、句集「あながい」(平十)。ほかに共著「俳句四考」「おおいと」等。

第二回

さんぽの
達人

山本勝之

(フリーライター)

熱を出して、布団のなかでウツラウツラしている、小さな鬼たちが、縫い針ぐらいの刺股や槍、薙刀などを持って、寝ている僕の背中や太股の内側、ふくらはぎ等、皮膚の柔らかいところを狙ってザクザク、チクチクと切り刻むのである。

朝起きると、太股の内側や、背中にポツポツと赤い小さな斑点が刻印されている。出血はしていないが、それが痒い。アトピーなんですけどね。

年末から風邪がぐずぐずとしつこく続いている。酒を飲みすぎたり、疲れが溜まると発熱する。身体中の関節、皮膚の表面が痛む。ひたすら水分を補給して、味噌ラーメンやうどんを食べ、布団にくるまり眠って眠って汗をかき、押さえつける。

うちの子供は小学生の頃、熱を出すと必ず「山田太郎」(マンガ『ドカベン』の主人公)が出てきて素振りもしないし、危害を加えようともしないかわりに、ただジッと自分を見

ている、それがめちやめちや怖いと言って泣くのだった。僕はそれを聞くと悪いとは思いつつも笑い出さずにはいられない。すると子供はますます泣くのであった。

それと、彼の目の前で、世界が袋をひっくり返すように寝返ってしまいうらしい。これはかなり怖いイメージなので僕は笑わないで聞くが、子供の乏しい語彙ではそのイメージが充分にこつちに伝わらないことに子供はだんだんイラだち、

「だからあ、ホラ裏返ってるじゃないの！」と癪癪を起こして、やはり泣く。

こういうことは子供だけに起こることかと思っていたんだけど、熱が高くなると、おかしなものを見たり感じたりするのはなにも子供だけじゃないようだ。

熱に震えながら布団のなかに丸まっていると、誰も居ない部屋のなかをドタバタと走り回る気配がする。人間ではない小さな生き物が二、三匹。わけの判らぬふざけた声音でわ

めきながら隣の部屋に走り込む。しばらくするとまたドタバタとやって来る気配。目にはみえないのだけど、確かに何かがいる。イヤだなあ、怖いですと弱気になると嵩にかかってドタバタやるので、無視する。「はいはい、居るのは判りましたから静かにしてくださいね……」と布団のなかから小さく声をかけてみたりする。

あと、普段は気にもならない声や音が訝えかえって、別の意味、物語を持ちはじめたりもするんですね。街の遠くで交わされている会話が、突然、寝ている自分の耳元で囁かれたように聞こえてドキツとしたり、ドアや戸を開閉する音が、何か凶悪な事件の始まりを暗示したり、車のタイヤの軋む音や、クラクション、風の音、家の梁や床が突然ドシツと鳴ったり、そんな音どもが熱でウツラウツラしている神経に、妙な引っ掛かり方をして別の物語を紡ぎだしたりする。音が最初にあって、それに引きずられるようにして夢を見て

いる、実際には聞こえてない音を頭のなかで作りだしては聞いている。そんなことをやっているみたいだ。

これは子供には怖いやって改めて思いました。汗をどんだんかいて、何度も下着を変えて、朝になると嘘みたいに熱が引いている。

「ああ、布団のなかで一晩、長い散歩に出たなあ……」と深い部分に疲れを残したまま、そう思うのだ。

普段の、犬に連れられての悠長な散歩とは違う、ちょっと間違えば半身どこかへ連れいかれそうな危うい後味が残る、夢のなかでの熱に浮かされての散歩。

だが、まてよと思う。普段の散歩が、いつも悠長であつただろうか。いつもなら外ですれ違えば「こんにちは」と気軽に挨拶を交わす近所の人、こちらの姿を認めたたん、目を逸らし、足早に通り返る。神経がそつちに行っていないので、こっちも奇怪しいなとも思わず声もかけずにすれ違う。そんなこ

とが何度かあつたのではないだろうか。

街や、電車の中で知り合いを見かけても、声を掛けるのはばかられる時というのが確かにある。不機嫌というのでもない、思い詰めているというのとも違う。放心したような、焦点を結ばないままに自分の内部を、深くぬうーと覗き込んでいるような不安な表情を浮かべて、それでいて足早に歩いていたりする。あつ、と思うのだが声を掛けるタイミングはもはや逃している。

近所の商店街に、同じ年の知り合いがやっている古美術店がある。というより、飲み屋で知り合い親しく話すようになった男がたまたま古美術商であり、同じ年であつたので遊びにいくようになったというだけの話なのだが。壁際に設えられた棚に、李朝の酒器を中心に30〜40点の陶磁器が並んでいるだけの、なんともガラーンとした店である。初めてこの店を訪れた人は、これで商売が成り立つのかと、たいがい驚き呆れる。だが、一点一点に



和

付いている値札を見ると、十万、二十万、高いものは五十万円以上の値段が付いていて、店にあるだけで数百万の商品ということになるわけだ。僕は骨董など、何もわからぬから「こんな、どこから拾ってきたかわかんないようなカワラケを、こんな値段で売るなんて詐欺みたいなものだな」といつも言っている。主人はちよつと嫌な顔をするが、
「でも、いいものはいいよ。ひとつ買ってみるか？」などと言って笑っている。
数年前までは、彼はここで「古物商」をやっている、古簞笥やちやぶ台、古式カメラやランプ等、雑多なガラクタに囲まれた商売をやっていたらしい。ところがある日突然、その空間に馴染んでいる自分に嫌気がさし、商品を全部知り合いの古物商に引き取ってもらい、以前から興味があつて熱心に勉強してきた陶磁器の商売に切り換えたのだという。
図書館や本屋へ行った散歩の帰りの夕刻に、僕はその店に立ち寄る。客がいるときは遠慮

するが、たいがいは店主が一人ぼつねんと座
って本を読んでいるばかりだ。

訪ねていけば、火灯もし頃でもあり「じゃ、
ビールでも飲むか」ということになる。

ここを訪れるようになって四年以上になる
が、僕はこの店で何ひとつ買ったことはない。
悪いとは思いつつ、散歩帰りに立ち寄る、居
酒屋がわりとして使っているようなものだ。
しかも、たいがいは店主が店の奥の冷蔵庫か
らビールや冷酒を出してきてくれる。で、今
日仕入れたばかりだという、十数万円もする
李朝の盃で飲んでみるなどと勧めてくれるの
である。

「骨董なんて判らん」と頑に言いはっては
いても、実際にその器を使ってみるという経験
が重なれば、それが良いものか、それほどで
もないものかという判断だけは自ずとつくよ
うな気がするから不思議だ。

で、その店にも、何も骨董目当ての先客が
いる時だけ遠慮して入らないというのではな

い。店主一人か座っていても、どうしても戸
を開ける気がしない時がある。

不機嫌というのでもない思ひ悩んでるというの
でもない、だけど理屈じやなく、「これは声を
かけない方がいいな、訪ねない方がいいな」
ということとは判っているのだ。人は人間であ
る前に動物であって、こういうことは、ちゃん
と判るようにできているのではないだろうか。
その話を店主にしたら、

「いや、先日昼間、本屋でキミを見かけたん
で、コーヒーでも飲もうよ」と声を掛けよう
としたんだけど、本棚の前に居ながら、なん
だかここにいないような表情をして佇んでい
るから、声掛けるの遠慮したんだよ」という
話。

犬に連れられ近所を徘徊している時だつて
どんな表情を貼りつけているか知れたもので
はない。女子供は泣き叫び、犬には吠えつか
れるなどということがないよう、洗面所の鏡
を見てから散歩にでかけようと思うのでした。

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●春隣

〈特選〉

いのち一つ芽生えし便り春隣

山本美代子

●嫁いだ娘からの便りだろうか。身ごもったことを告げて来たのだ。上中の句から、その命を大事にはぐくんできて欲しいと願う気持ち、たつぷり伝わって来る。季語の配合も、それを手助けて手ばかりがない。

〈佳作〉春隣マネキンの瞳の海に向き

平川とおる

モカ好きのモカ碾く匂ひ春隣

河合富美枝

嘶家の袖裏の緋や春隣

別役玲子

●仏の座

〈特選〉

仏の座対岸の尾根鮮やかに

池田伊吹

●「対岸の尾根」からは相当の川幅と、向うの野の広がりを感じる。その果てに孤峰というよりは、峰を連ねた稜線が浮かんでくる。

増田河郎子・選

小さい草花から大景に移って行く視線は、写真より映画のような効果を見せている。

〈佳作〉阿弥陀寺へ歩を伸ばしけり仏の座

河合富美枝

寄せ植ゑに小さき札あり仏の座

穴田美智

ままごとの筵の端の仏の座

蘭田郁子

●自由題

〈特選〉卒業生窓の内外磨き合ふ

北川弘子

●卒業間近の生徒の意だろう。内外二方に分かれて、窓ガラスを磨き合う。自分たちを育ててくれたことへの、せめてものお礼である。「内外」は「うちそと」である。向き合う双方の視線と手の動きがほほえましい。

〈佳作〉子の丈の餅搗くほどになりにけり

松井永吉

吹雪く夜は耳聴くをり寺の庫裏

佐藤雅子

水温む天衣無縫の孫ばかり

西島喬介

●春隣

春隣寺苑草やぐ稚児の列
僧の下駄音軽やかに春隣
相輪のかがやきも増し春隣
一湾に漁火殖ゆる春隣
朝日さす外科病棟の春隣
老松に風のざれごと春隣
習ひ始む少女のピアノ春隣
「サクラサク」孫を祈りてはるどなり
身ごもりし娘はけらけらと春隣
四国路に鈴の音響く春隣
陽だまりに猫背伸びする春隣
豆つぶて鬼逃げて行く春隣
小波のたわむる渚春隣
じゃんけんでグー出す春隣
冠を正して孔雀春隣
野仏に一心あづけ春隣
春隣る猫は留守勝昨日今日
電飾の客船どしりと春隣
春隣汐で清める今日の舟
春隣牛歩のごとく日は伸びる
顔を打つ風の痛さや春隣

●仏の座

清音を足裏に聴くや仏の座
喉仏通りし粥の仏の座
仏の座七草すめば忘れられ
牛追いの足に踏まるる仏の座

大場清
大場清
大場清
河合富美枝
佐藤雅子
佐藤雅子
佐藤雅子
山本美代子
松井永吉
中島一子
中島一子
中島一子
島谷ときを
北川弘子
北川弘子
池田伊吹
小林恵美
増田信子
加藤政男
加藤政男
浜口佳春
河合富美枝
佐藤雅子
中島一子
井村善也

粥炊いて仏の座をも入れこんで
散歩して犬がかぎゆく仏の座
仏の座岩に添いゐて緑をぶ
海の風はぐみて光る仏の座
真みどりの海より青く仏の座
溝川の流れ稚し仏の座
母見舞ふ足元にふと仏の座

●自由題

御和讃へひとみ潤ませ冬すみれ
いささかの仏心うごく冬の蠅
田平子や旬旬前退自衛官
年酒酌む羽州街道と云う地酒
初戎村に為来り薄れけり
白梅や歴代城主の紋瓦
ろう梅や輝政公は城の内
目出度くも家族揃いて初詣経
高らかに修正念仏年始め
修正会集ふ信者と声あげて
採石場来光充ちて初仕事
小春日や石材店の大仏
雪掻を朝の仕事と子の使ひ
どんど焚き煙の匂ひ持ち帰る
大皿に頑固づらしがしら盛る
初旅の腰に遺品の万歩計
身のおきどなき冬の日を草むしる
七草の過ぎていつもの野に戻る
万歩計一歩枯野の端を蹴む

山口信子
野村多加子
小林恵美
平川とおる
北川弘子
島谷ときを
増田信子
河合富美枝
河合富美枝
佐藤雅子
佐藤雅子
佐藤雅子
山本美代子
山本美代子
上野卓誠
上野卓誠
上野卓誠
松井勝
谷しげ子
谷しげ子
井村善也
加藤政男
加藤政男
増田信子
島谷ときを
平川とおる

好評
発売中!!

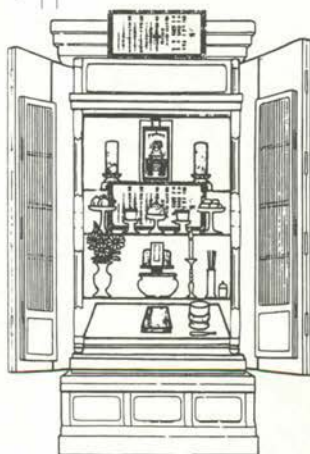
お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。

堂内用、境内地用等、寺院仕様もございます。



寺院名が入ります。(版代別)



定価：大（32.0×18.3cm）735円／小（27.3×14.2cm）420円

注文・問合せは
法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

第五回浄土誌上句会のお知らせ

季題
風光る

蝶

自由題

×切・三月二十日

発表・『浄土』五月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

- いずれの題とも何句出しても可
- 特選各1名・佳作各3名

応募方法

葉書に俳句（何句でも可）を書き、住所、氏名を必ず忘れないで下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

☆まちがいは7ヶ所あります。



『私、藤井の新刊が出ました。「まんがでおぼえる囲碁入門（山海堂）」という本です。書店で注文してね！』

まちがいがし

答えは31ページにあります。

●J・FORUM(浄土フォーラム)

毎号、ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー「J・FORUM(浄土の広場)」。

俳句や短歌などのほか、書評や随筆、詩、身近な出来事や情報などを、左記の要領でどなたも応募下さい。

1 随筆・短歌など…四百字詰め原稿用紙十枚以内。
2 俳句・短歌・川柳など…。

3 その他、本誌の掲載記事に関するご意見やご感想など…適宜。

いずれもタイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。

また、原稿は返却致しませんので、必要な方は事前にコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈致します。

●新規会員募集

当会では、随時会員を募集しております。

お友達やお知り合い、寺院の会員の方は檀信徒の方々にも、是非法然上人鑽仰会への入会、そして「浄土」の購読をおすすめ下さい。ご連絡頂け

れば、見本誌、パンフレットをお送りいたします。

●新規会員紹介(敬告略)

購読会員

東京	江戸川区	萩原美恵子
秋田	二ツ井町	成田裕子
神奈川	茅ヶ崎市	大場 湊
一般会員		
東京	港区	光尊寺



湯につかり唯だらだと春を待つ

岱潤

私たちの年代では叶うはずもない夢物語だが、少なくともこうした感情を嫌悪したくない。よく人に会うと「お忙しそうですね」と言われるが、私はひろさちや氏になり「忙しくはありません、ちよつとスケジュールが過密なだけです」と答えるようにしている。つまり忙しいという字がよくないのだ。横に並べても、縦にしても「心を亡くすか、忘れるか」の意となってしまう。できるだけ忙しくならないよう心がけたい。

さて二月五日に従来からの懸案であった。羽田の穴守稲荷神社の大鳥居の移転作業が行われた。移転しようと手を加えようと、必ず工事関係者に災いがあった、いわく因縁つきの大鳥居である。今回も地元住人は、何事もなければいいのだがと不安であったが、工事の現場責任者は、テレビのインタビュアーに「現代の最新の技術で行うのです、祟りなど関係ありません」と言い放ちながら、神主に御払いをしてもらっていた。何とも日本人的であった。

それにしても、なぜ科学のみを信じようとする人々は、祟りなどという人知を越えた世界、明日や未来という誰にも予測のつかないことまで、科学に頼り、絶対の自信ありげに言うのだろうか。その姿はむしろ滑稽にさえ思える。

宗教的祈りをめめしきことと考える風潮は、宮本武蔵の書にも現れていることだけれども、最近の科学万能の思考によって、現代人にはより一層その感覚があるようだ。今こそ宗教的祈りの、人間にとっての重要性を強調してゆきたい。(岱潤)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
村田洋一
井原法正
佐山哲郎
間川彰道

編集顧問

大室了晴

浄土

六十五巻三月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十一年二月二十五日
発行 平成十一年三月一日

発行人 真野龍海

編集人 宮林昭彦

印刷所 株式会社 シーティイイ

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七
FAX 〇三(三三七八)七〇三六
振替 〇〇一八〇八八二二八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷害ならぬ



民家近し、静かに



足元注意



踏切あり



注意



故障



安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



きれるな



割れ物注意



安全第一



歩行者注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111 (大代表)

ご注文・お問い合わせは
法然上人顕仰会まで
電話:03-3578-6947
FAX:03-3578-7036(24時間)

※詳しくは本誌31ページをご覧ください。

お仏壇用
宗旨布教額も大好評
発売中

大(320×183mm) 735円より



遂に
完成

選擇集がよく解るお絵解き
選擇集十六章之図

布教用グッズとして
念仏の教えを語るのに
最勝の選択

本堂・客殿に最適 豪華額装入り
(585×465mm)

頒価20,000円(税・送料別)

解説書付き

※お届けまでに四週間ほど
かかる場合がございます。

私たちの宗旨
名稱 淨土宗
宗祖 法然上人(源空)
開宗 永享元年(寛弘二十五年)
本山 阿彌陀佛(無量壽佛)
稱名 南無阿彌陀佛
教え 阿彌陀佛を念ふことにより
無量阿僧祇劫の善業を成就し
極楽浄土に往生する
お経 無量壽經(阿彌陀經)
開宗の経典 阿彌陀經
著撰者 宗祖法然上人著
宗祖法然上人著

小(273×142mm) 420円より

私たちの宗旨
名稱 淨土宗
宗祖 法然上人(源空)
開宗 永享元年(寛弘二十五年)
本山 阿彌陀佛(無量壽佛)
稱名 南無阿彌陀佛
教え 阿彌陀佛を念ふことにより
無量阿僧祇劫の善業を成就し
極楽浄土に往生する
お経 無量壽經(阿彌陀經)
開宗の経典 阿彌陀經
著撰者 宗祖法然上人著
宗祖法然上人著

民間の
伝統芸能と宗教

最終回

連載

宇宙と自然の生命力を 反映した芸能

伝統芸能研究・千町の会代表 作家

川元祥一

『万葉集』の第十六巻に「ホカヒヒトが詠ふ歌」というのが二首あって、そのひとつは鹿の歌である。この歌は万葉時代（七、八世紀）のホカヒビト＝旅芸人が民家の門口に立つて歌い御祝儀を貰ったもので、私がこれまで書いてきた門付芸の一種と考えられる。

この歌がホカヒヒト＝寿又は祝として歌われたことはたしかなのだ。しかも歌の内容は狩猟した一頭の鹿をいかに料理し、おいしく食べるか、あるいは一頭の鹿が食用だけでなく毛皮や角や爪がどのように活用されるか具体的に歌われている。念のためその一部を紹介しておく。「……（略）……我が角は み笠のはやし 我が耳は み墨垣（略）我が毛らは み筆はやし 我が皮は み箱の皮に 我が肉は み膾（刺身・筆者注）はやし 我が肝も み膾はやし（略）我が身一つに七重花咲く 八重花咲くと……」

ところでこの歌がなぜ寿なのか。祝歌なのか。このことが、この小論のテーマである民間芸能にとって大切なことになる。

この歌は、古くから使われる日本語でいこうと「言寿」なのであるが、世界的な類型でいうと、これもまた類感呪術なのだ。類感呪術はこれまで述べてきたように稲作や漁業などの労働・肉体的作業を実際の労働を行う前に、それを模擬的に行うものだ。この模擬的表現も肉体的表現が基本であるのはいうまでもないが、言葉だけでも模擬的表現をすることが出来る。何かを作る労働過程を言葉で述べ、そのことによって類感呪術と同じように、その実際の効果を良からしめようとする。

鹿の食べ方や利用法を歌う歌が寿であり祝歌である理由はそこにある。「春駒」という正月の門付芸がある。江戸から東京に変わってなればらく東京の正月の町を賑わせていた。これは馬の頭を形取った木偶を持って歌いながら踊る（本当は舞うという）のであるが、歌の内容は絹を生産する養蚕農業の全過程を歌っている。すべて歌うと百五十行以上になつて簡単には紹介できないが、「蚕の種を買うなら桑名や豊橋、茨城の種がよい」「種は女の

懐のような温であたためる」「五日目に虫が生れる。この虫に桑の葉をやる」「桑の葉を使べながら蚕は四回眠る……」このような現実的な過程が歌われている。しかもこの歌と踊（舞）が民間芸能として各地に残っているのである。（詳しくは拙著『旅芸人のフォークロア』農文協を読んでほしい）

ところで、身体表現であれ言奏であれ、何かを生産する労働過程を前もって模範的に表現したからといって、それが現実の生産結果を本当に豊かにするだろうか。

世界中にある類感呪術は古くて遅れた文化として否定されてきた。ジェームス・フレイザーというイギリスの人類学者などは「それは錯覚の連続であり、ごまかしの宗教」といった。しかしこのような否定は正しいだろうか。そのような問い直しが最近始まっている。ジェームス・フレイザーが類感呪術を否定したのはキリスト教文化を背景としていることはあきらかだ。つまりここでもやはりキリスト教文化による古い呪術の克服がある。

何回もいうとおり日本では仏教が呪術を克服する位置にあったしその動きは何回もあったが、それを徹底することなく習合した。

そのため類感呪術が各地に残り、それが民間芸能の一部として残っている。しかもそこには一定の特徴がある。その特徴は、同じ仕事（労働の模範表現）が何百年間も同じ形をつづくことである。つまり反復が特徴だ。

日本の伝統芸能や民間芸能が何百年もつづきながら若者に人気がなく、今では後継者不足に悩んでいる原因は、この反復にあるといつてよい。同じことを何百年もつづけるのはたいくつで面白くもない。私自身、ながいあいだそのように思っていたし、古くて遅れた文化だと思っていた。

しかし、最近はその反復の特徴を見直したいと考えている。遅れた文化と決めつけてはいけなさと考える。

反復の民間芸能は世界中にあるが、なぜ反復するかといえば、基本的にそれは文字を使わない文化・口承文化だからだ。文字を使え



春田打(盛岡) 田植、えんぶりで田をならす模擬表現。
こうして民間の伝統芸能が生れた。



エビス舞(松山) 海の漁が豊かであるように前もって模擬的表現をする。
ここから人形浄瑠璃が生れた。

ば文字に書いてその芸を後に伝えることが出来るし記録しておいて変えることも出来る。

しかし日本人は、その大半の人がごく最近まで文字を使わなかった。文字を使わない国民が自分たちの文化や芸を後につたえようとするとは必然的に身体表現か声による歌となる。

しかもその表現は米の作り方や絹の作り方を歌っているのだ。だから一人一人が勝手に歌詞を変えてはいけなし、時代によってコロコロ変つてもいけない。だから同じ動作同じ文句をくり返す。日本には労働の模擬表現の民間芸能ばかりでなく、いろいろなものがある。しかしそれがほとんど反復によつて伝承されるのは口承文化であつたせいなのだ。

このように考えると、文字文化を古くからもつ西欧の、その近代的宗教としてのキリスト教文化から否定されたとはいへ、われわれが同じように否定してはいけなйдらう。しかもここまで考えてきて重要なことが浮かびあがつていると思う。類感呪術の模範的表現は、ただの宗教的信仰ではなく、米や絹など

の作り方、あるいは魚の捕り方、鹿の食べ方など後継者に伝える機能をもつていたのだ。

つまりこれは、口承文化における教育の場であり、表現でもあつたことがわかる。そしてさらにいえることは、類感呪術は口承文化の中では技術の伝播として実際的な効果をもつていたことである。

こうしてみると、文字文化によつて軽んじられたり差別された日本の口承文化、その中の呪術的要素が簡単に消えなかつた原因がわかる気がする。

また、明治維新以後の日本近代化に見られる欧米文化の模倣にもかかわらず、民間芸能などの伝統的文化が根強く残る原因もわかる気がする。すくなくとも、文字文化の代表的なものとして早くから日本に伝来した仏教が、何回かの呪術とのたたかいをもちながらも、結局のところ克服しきれずに、習合してしまつた原因はここにあるのではなからうか。いうなれば、日本の呪術は食料を生産する労働に直結していたから強かつた。すべての呪術